

平成30年度 JA営農指導実践全国大会を終えて

平成30年度で第3回を迎えたJA営農指導実践全国大会を本年2月21日から22日にかけて、約300名の参加者を得て都内で開催しました。全国を8ブロックに分けて、特に優れた産地振興や技術普及にチャレンジした営農指導員を各ブロックの代表として選出し、全国大会では、その8名の取り組み内容とプレゼン力について審査し表彰を行いました。

これまでの全国大会を通して初となる2名の女性営農指導員を含む8名の代表者が、1人20分の制限時間の中で、日頃の活動内容を心を込めて真摯に発表しました。生産性の向上や労働力支援、そして販売事業の改革など地域の実情に応じた多様な取り組みが発表されいづれも優劣つけ難く、本人の努力のみならず、地元JAの経営者や上司あるいは同僚の理解や温かい励ましを受けながら、組合員に寄り添い、現状の課題解決にとどまらず、農業者の所得増大や将来に向けた持続可能な農業を目指して奮闘している姿が思い浮かび、会場で生で聞いているということもあって、強く心を揺さぶられ込み上げてくるものがありました。



肱岡弘典

(JA全中常務理事)

JA全中では、過去2回の全国大会での発表内容に鑑み、今回は、JAの農業振興・農業者の所得増大への取り組みを広く組織の内外に周知する良い機会として捉え、メディア対策も行いました。農業専門紙に加え、JA全中と接点のある地方紙47紙のうち約8割で全国大会の概要が報道される結果となり、その関心の高さを改めてうかがい知ることになりました。

また、参加者からの評判が大変良いことに加え、研修会等での活用など各都道府県中央会からの要望も多いことから、JAグループHPに8名の発表者の動画も公開しています。ぜひ、積極的にご活用いただければと思います。

全国のJAには約1万3,000人の営農指導員がおり、今回の8名と同じように農業の生産現場

でそれぞれが組合員と向き合い奮闘しておられます。こうした取り組みは、JAグループ内では、当たり前、当然のことと思われがちですが、前述した地方紙の関心の高さを思うとJAの評価を高めることともいえます。参加者から寄せられた「刺激を受け業務に対するモチベーションが上がった」「営農指導業務の実践者から直接学べる貴重な場であり、次年度もぜひ参加したい」といった感想を数多く聞くと、営農指導員のみならず、高齢化している組合員のくらしにしっかりと寄り添って活動している職員や営農・経済、信用、共済等の複数の事業の「部門の壁」を壊して、「真の総合事業体」として相乗効果を生み出すべく努力している職員など、彼ら彼女らの地道な取り組みに温かい光を当てていくことも、JA自己改革の「見える化」と同様にとっても大切なことだと改めて痛感しております。

JA全中は、農業者の所得増大とそのことを担保する地域社会の維持を一体的なものとして捉え、今後も引き続きJAの営農とくらしに係る取り組みを支援してまいります。